連続テレビ小説

こころ

優作の目指す都市の中での地域医療とは？

―優作にはモデルがいた。その医師の実践とは？

〈こころ〉の医事監修を行う「たいとう診療所」の今井稔也医師は、仲村トオルが演じる朝倉優作のモデルとなった人物。ドラマの中で優作の目指す医療とはどういうものかについて振り返るとともに、都市の中での地域医療を実践する今井医師に話を聞いた。

朝倉優作

優作の目指す地域医療

こころと結婚した朝倉優作は、念願をかなえ浅草で地域医療を行うため診療所を開いた。新潟県六日町で診療所を開く父・有礼のような医療を、東京で実現したいという優作。有礼は六日町に小さな診療所を開き、地域のかかりつけ医として、周辺に住む人たちの健康を見守る役割を果たしている。そんな父の姿を小さなころから見ていた影響もあり、優作は、大きな病院では患者に目が行き届きにくいと考えていた。今までの放送から、自分の目指す地域医療について優作がこころに、どんなことを話していたのかを振り返ってみよう。こころはそんな優作の姿に惹かれていったのだ。

地域医療とは何かと聞くこころに優作は「地域に密着して、患者さん一人一人の名前も病名も過去にかかった病気も、もっといえばその家族全員の健康状態も把握できる医療の形」だと答える。（4月5日の放送より）

優作はこころに、浅草で診療所を開きたいわけを話す。「浅草は商売の町だ。わざわざ大きい病院に行って、何時間も待たされるんじゃ商売に響く。自然に足が遠のいてしまう。もっと気軽に行けるところがあれば、早期発見もできるし、どんな小さな病気だって未然に防ぐことができるんじゃないかって」（4月7日の放送より）

今井医師の人柄に勇気づけられました。

今井さんの所には、3回くらい伺いました。今井さんが「仲村さんの人生にとっても、きっと無駄ではないので」といってくださり、往診にも同行させていただきました。

下町の診療所やそこに来る人たち、通院できない状態の人がいる家庭も見せていただいて、もちろん医師としての優作のヒントもいっぱいありました。でもそれ以上に、今井さんの人柄に、人間・優作をやるうえで勇気づけられた。今井さんの診療や往診を見なかったら、ちょっとこういういい人をやるのは恥ずかしいなと思うくらい、優作はいい人だという印象があった。でも、今井さんに会って「本当にこういう人がいる」と実感できた。じゃあ恥ずかしがらずにいい人をやろうって思うことができたんです。

今井医師の実践する地域医療

今井医師は6年前から東京・台東区で診療所を開き、地域医療を実践している。台東区には縁のなかった今井医師がここに診療所を開いたのには理由がある。都市の中心部には、大きな病院があり、専門医はたくさんいるが、どんな病気でも相談ができる、地域のかかりつけ医の存在は少ない。かつては無医村での医療にあたりたいと考えていた今井医師には、東京の都市部はさながら無医村のように見えたのかもしれない。

今井稔也

いまい　としや　たいとう診療所・院長
1966年東京生まれ。'97年10月東京・台東区に「たいとう診療所」開設。'99年3月「訪問看護ステーションわっか」開設。2003年4月、場所を移転して、より総合的な地域医療を行う。

大都会だからこそ陸の中の孤島になりうる

6年間地域で生活しながら診療所をやってきて、近隣に住む人たちに、仲間として認めてもらうことができたようです。

実際に診療をはじめて、この地域では陸の孤島が生まれていることもわかりました。住居兼用の古いビルでは、エレベーターもなく、階段もとても急です。そのため、足の具合が悪くなると、簡単に外に行けなくなる。閉じこもりっきりになるケースも少なくありません。また、車を持っているわけではありませんから、誰かに外に連れていってもらうわけにもいかない。救急車で運ばれ、入院するような事態になって初めて外に出る人もいるのです。

9時から1時まで外来の診察を行う診療所。フローリングの床、木目の家具と、まるで居間。出迎える今井医師もピンクのダンガリーシャツにチノパンツと"お医者さま"スタイルではない。診察時も専門用語は使わず「脳は柔らかいからお豆腐のように水の中に浮いている」などと説明をしていた。カルテも看護やリハビリのスタッフが見てすぐにわかるように、日本語で記入する。

健康の相談場所としての診療所

診療所の医師としての僕の役割は、ちょっと体の調子が悪いなと思ったら、気軽に相談できる人であること。僕の携帯電話は24時間、患者さんからの連絡を直通で受けられます。近くにいるから、往診にもすぐ行ける。病歴も家族構成もわかっていて、お互いに何かあったときに責任を持ってかかわれる医療。それが地域医療だと思っています。ですから、往診はしますが、患者さんが通える範囲に住んでいることが前提です。下町は、むこう3軒両隣でことが足りちゃう。それは、医者も同じで、医療という役割を持つだけで、大工さんのように、その地域にいる一人の専門職なのです。

1時半からきょうは6件の往診。細い路地も自転車ですいすい走る。5年間往診している女性は急な階段を上がった2階の部屋に住んでいた。なかなか階段を下りる勇気が出ず、「まだ外来は難しい」という彼女に、「ほかの外来患者さんのほうが歩くの遅いよ。スタッフにも会ってやって」と外来の誘い。6月に外来に来ると約束してもらった。

おばあちゃんは今井医師に、ご飯をたくさん食べていること、便が順調に出ていること、大好きな巨人軍のことを話す。今井医師も「おいしくものが食べられて便が出て、ひなたぼっこできればいうことない。松井、ホームラン打ったね」と答える。